

# 不登校経験を持つ若者たちの もう一つのキャリアパス

## 北村 真也



### 第1章 キャリアって何？

#### 4. キャリアの複線化と語りの可能性

不登校やひきこもり経験のある若者たちの就労支援は、つまづくことなくストレートに大学まで進学していった学生たちの就職活動をモデルとしているように思います。彼らは、ストレーターの大学生のように行動できないからこそ支援が必要なのであって、その支援を受けることによって少しでも普通の大学生たちの行動パターンに近づけていくことを目的としているように感じられます。

では今の学生たちの就職活動は、本当に彼らのモデルとなり得るものなのでしょうか？このことについて検証するために、私たちは現在就活中の複数の現役大学生に来てもらい、就活の実態について話してもらった機会を持ちました。しかしそこで見えてきたものは、大変厳しい就職状況の中で大量の情報に翻弄される学生たちの姿でした。彼らは、大学の就労支援センターやインターネット上の就労に関する無数のサイト、あるいは就労支援を行うような専門学校の講座やセミナーなどから、毎日のように情

報を受け取っています。そんな状況の中で、当初に抱いていた夢や希望がどんどん打ち砕かれ、不安や焦り、あきらめや妥協の中で、就労先を決めずにはいられなくなり一旦就職はするものの、比較的短期間で離職する、といった学生たちが増えているのもまた事実なのです。ただ、一方で彼らは口々にこう言います。「こんな就活のような厳しい機会がなければ、僕たちは今までの人生を振り返ったり、現実社会について真剣に見つめるような機会がなかったかもしれない」と。そして、果たしてこのようなキャリア形成は、不登校やひきこもり経験を持つ若者たちにとって一つのモデルとなり得るようなものなのでしょうか？この問いこそが、今回の研究事業の出発点でした。そしてそこから今度は、彼らのキャリア形成のモデルとなり得るものは果たして存在するのだろうかという新たな問いが立つことになります。

この問いについては、もはや若者のキャリア形成においては、「モデルなき時代」に突入しているのだと私たちは考えています。ドイツにおけるメツガー博士の話にあった

ように、モデルが存在しない故に若者たちが社会へと接続されていく過程が困難を要するようになってきたのです。ポスト近代社会においては、答えが瞬間的に不確実なものへと追いやられてしまいますから、若者たちを定型的な就労支援のプログラムに乗せていくのではなく、モデルなき時代のキャリア支援をどう考えるかという視点に立ち、個々の就労支援をどう考えるという方向付けが必要となっていくように思います。

また、モデルとなるようなキャリア支援の道筋が見えにくくなっている時代においては、個々の当事者の抱える状況に沿った、それぞれの個別のキャリアパスが模索されるべきではないかと考えています。そこに、キャリアの複線化が求められるように思うのです。そしてさらにファーストキャリアから出発して、それぞれの個人がキャリアそのものを更新し続けることが、今後はとても大切になってくるように思います。

また、若者たちが大きく変容を遂げようとする時、そこに語りの世界が生まれることを私たちは経験的に知っていました。そして、そんな語りの世界をインタビューによって言語化してまとめたものが、平成 24 年度生徒指導進路指導総合推進事業として提出した『自己変容を伴うキャリア形成』というレポートでした。

不登校やひきこもり経験をもつ若者たちの多くは、過去の辛く苦しかった経験をただ「苦しい」としか表現できなかったり、「誰かのせいで自分はこうなった」と他人

にその原因を転嫁して自分に向き合おうとしなかったりすることが多いです。しかし、自分に向き合おうとすることなしに、大きな変容は決して生じません。彼らに変容に向かうためには、ある一定の勇気を手にしてもらわなければなりません。そのためには、彼らが安心して、その中で何かを通して自信を獲得できる継続的な営みが必要となってきます。知誠館ではその媒介として「自律的な学び」を活用するのです。

自律的な学びは能動性を必要とします。自分で読んで考えて判断することが求められるのです。(これについては、マルカム・ノールズの「自律学習理論」が知誠館の教育の一つの柱になっています)そしてこの姿勢と経験の蓄積が、彼らに一定の自信を定着させます。消費的な文化の中では、コツコツと何かを継続的に積み上げていくことが軽視されてしまいます。面倒なことを引き受けることの大事さが喪失されていくのです。しかし、能動性を伴う変容ということ的前提としたとき、コツコツと何かを積み上げていくことや面倒なことを引き受けていくことこそが、大きな変容を生じさせる条件となり得るのだと私たちは考えています。知誠館の若者たちは、学びという活動を通して自信と安心を手に入れ、やがて仲間にも勇気をもらいながら、少しずつ自分自身に向き合い始めます。そしてさらに、語りの場を通して、彼らの過去を彼らのコトバによって新しい意味へと書き換えていきます。ここに語りの世界の果たす役割があるのです。

今年度の研究では、昨年度の取り組みを

さらに進めていきました。この若者たちの語りを促す一対一のインタビューをさらに発展させて、「森の語り場」という公開の場でのインタビューをおこない、周りの者がいつでも場に参加できるセッション構造を用意しました。形としてはひとりの若者が聴衆者の前でインタビューを受けるというのですが、その内容は、聴衆者の辛い過去と共鳴し、共有化されていきます。それによって聴衆者は、そのインタビューを聞きながら自分自身の過去と向き合うという内的作業をおこなうことになるのです。ここでは、共有化され得る経験があるということが大変大きな意味を持ちます。話し手が開示する辛い経験が、決して自分一人だけのものではなく、その辛さ、痛みを共有できるということが大きな勇気づけになるからです。またこのような経験を通して、場に深い連帯感が発生することもあります。共有される要素があるということが出会いの可能性なのです。そして聴衆者も、このインタビューの場に具体的な発言を通して参加していきます。するとそれが若者自身に更なる刺激を与えることになり、全体としてより大きなダイナミクスが生まれる構造を作り上げていくのです。

さらにもう一つの語りの場として、2年前から継続的に実施している若者支援者たちの学びの場「南丹ラウンドテーブル」があります。このラウンドテーブルでは、毎回冒頭で、知誠館における若者たちの変容の物語がエピソードとして紹介されます。そしてそれをもとに援助者たちが、普段自分たちが当たり前としている支援に関わる概念そのものを改めて問い直す、という省

察的な思考を促していきます。例えば、日常的に支援の現場で仕事をこなしている支援者に、「支援とは何か？」ということをおいにかけていくのです。またこの場には、若者支援に関わる教育、福祉、心理関係者、それに学生たちまで参加していますから、さまざまな領域の意見をもらうことが可能です。この場では、結論など求めません。大事なことは、自分の考えがこのセッションの渦中で更新され続けるかどうかということなのです。

ラウンドテーブルにおいては、当事者である若者たちも、私が紹介するエピソードを介して間接的に場に参加しています。しかし今年度の途中からは、実際に彼らが直接セッションの場に参加するという状況が生まれていきました。つまりそこでは、援助者と被援助者とが同じ場に集い、互いに「支援」ということ、あるいはその周辺領域の概念そのものものについて意見を交わす状況さえ生まれてきたのです。ここでは、援助者から被援助者へという上意下達的な情報の流れはその勢いを失います。援助者と被援助者が一堂に会し語り合うことによって、一方通行の流れから双方向の流れへと変わっていくからです。そうすると、被援助者だけに変容が起こるのではなく、双方に変容が生じていくようになるのです。

このように本稿では、知誠館を舞台にした語りを媒介に成立する2つのセッショングループを取り上げ、語りの世界の持つ可能性と変容場面における他者の関わりの意味を考えると共に、変容を前提に置いたキャリア形成のあり方について考えてみたい

と思っています。

